



平成27年度
第41回 鳴教大
教育・文化フォーラム

FORUM



鳴門教育大学

第41回

平成27年度

鳴 教 大

教育・文化フォーラム

目 次

◇第41回 鳴教大 教育・文化フォーラム実施要項	1
--------------------------	---

● 開 会 式

総合司会者挨拶	
鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 吉本 佐雅子	2
主催者代表挨拶	
鳴門教育大学 理事・副学長 山下 一夫	2
共催者代表挨拶	
阿南市教育委員会 教育長 新居 正秀	3

● 基 調 講 演『子どもの学びと育ちをつなぐ』

☆講演者	
前田 洋一（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）	4

● シンポジウム『地域で考える子どもの学びと育ち －阿南市の実践を通して－』

☆司 会	
太田 直也（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）	
☆パネリスト	
外山 永子（福井中学校 校長）	11
浅野 晋一（椿町中学校 校長）	16
稲村 健一（見能林小学校 校長）	8
石橋 ゆかり（津乃峰小学校 教諭）	14
☆助言者	
前田 洋一（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）	20

● 閉 会 式

主催者代表挨拶	
鳴門教育大学 理事・副学長 山下 一夫	23

◇アンケート集計結果（来場者）	25
-----------------	----

第41回 鳴教大 教育・文化フォーラム実施要項

1. 日 時 平成27年8月6日(木) 9:30 ~ 12:00
2. 会 場 阿南市情報文化センター コスモホール (<http://joho.hanoura-anan.jp/>)
〒779-1101 徳島県阿南市羽ノ浦町中庄上ナカレ16-3
TEL 0884-44-5000 FAX 0884-44-6080 mail joho@hanoura-anan.jp
3. テーマ 「地域で考える子どもの学びと育ち -阿南市の実践を通して-」
4. 趣 旨 地域力の大きな資源である活力ある子どもたちを育てる事は、地域活性化のためにも重要な命題である。現代、少子化、核家族化などをはじめ、子どもの育成に関わる環境は、特に地方地域においては、厳しく、地域における様々な連携体制を活用し、地域の子どもの育成に当たる事が不可欠な状況になっている。阿南市では、子どもの学びと育ちを主眼に、小学校と中学校の連携体制、家庭学習をめざした家庭との連携、公民館など教育関係行政との連携などを進め、地域において子どもの育成に取り組んできた。本フォーラムでは、「子どもの学びと育ち」、「地域で考える」をキーワードにした阿南市の先駆的な実践、その課題などを通して、これからの「地域で子どもを育てる」取組について考えたい。
5. 参加対象 現職教員及び一般市民
6. 参加費 無 料
7. 日 程

時 間	内 容	備 考
9:00 ~ 9:30	受 付	
9:30 ~ 9:45	開 会 式 ・主催者代表挨拶 鳴門教育大学 理事・副学長 山 下 一 夫 ・共催者代表挨拶 阿南市教育委員会 教育長 新 居 正 秀	総合司会 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 教授 吉本佐雅子
9:45 ~ 10:25	基調講演『子どもの学びと育ちをつなぐ』 ・鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 前 田 洋 一	
10:25 ~ 10:35	<休憩・シンポジウム設営>	
10:35 ~ 11:55	シンポジウム「地域で考える子どもの学びと育ち -阿南市の実践を通して-」 司 会 ・鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 太 田 直 也 パネリスト ・福井中学校 校長 外 山 永 子 ・椿町中学校 校長 浅 野 晋 一 ・見能林小学校 校長 稲 村 健 一 ・津乃峰小学校 教諭 石 橋 ゆかり 助言者 ・鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 前 田 洋 一	質疑応答含む
11:55 ~ 12:00	閉 会 式 ・主催者代表挨拶 鳴門教育大学 理事・副学長 山 下 一 夫	

8. 主催・共催及び後援

- 主 催 国立大学法人鳴門教育大学
- 共 催 阿南市教育委員会
- 後 援 徳島県教育委員会, 徳島県国公立幼稚園長会, 徳島県小学校長会, 徳島県中学校長会,
徳島県高等学校長協会, NHK 徳島放送局, 徳島新聞社, 四国放送(株)

第41回 鳴門教育大学 教育・文化フォーラム

「地域で考える子どもの学びと育ち –阿南市の実践を通して–」

平成27年 8月 6日(木)

【開会式】

総合司会 (吉本)

お待たせしました。これより、第41回鳴教大教育・文化フォーラム「地域で考える子どもの学びと育ち–阿南市の実践を通して–」を開会いたします。

私、本日の総合司会を務めさせていただきます、鳴門教育大学地域連携センター所長、吉本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、開会にあたり主催者を代表しまして、鳴門教育大学理事・山下一夫より、ご挨拶を申し上げます。山下理事、よろしくご願ひいたします。

【主催者代表挨拶】

山 下 一 夫 (鳴門教育大学 理事・副学長)

皆さん、こんにちは。連日、猛暑が続いておりますが、そのような中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。学長の田中雄三が本日、急用ができたため出席できません。申し訳ありませんが、私が主催者を代表して挨拶を述べさせていただきます。

本日は、「子どもの学びと育ち」、「地域で考える」をキーワードにした阿南市の先駆的な実践、そしてその課題などを通して、これからの「地域で子どもを育てる取り組みについて考える」という主旨で開催いたします。私自身もフロアから聞かせていただいて、大いに勉強したいと思っております。

そもそもこの「鳴教大教育・文化フォーラム」とは何か、ということですがけれども、鳴門教育大学と徳島県の各教育委員会・学校が協力して、その時々教育界のテーマを取り上げ、講演・シンポジウム等を行ってまいりました。

第1回が平成7年、ちょうど20年前ですけれども、“いじめ”をテーマに取り上げて鳴門市で開催いたしました。そして第11回、平成12年が“不登校”をテーマに阿南市教育委員会と共催で、この地で開催いたしました。第1回と第11回と両方に、私シンポジストとして参加しましたけれども、本学が徳島県下で根づき育ってきたなあという非常に感慨深いものがあります。

特に、本学と阿南市の教育委員会・学校との間には「チェーンスクール」の取り組みや、サテライトを利用した「つながルーム」の取り組みなど、両者が協力して作った新しい芽も出てきております。また、鳴門教育大学を卒業された方が、この阿南で教鞭を執っておられますし、更に“学び続ける教員”として鳴門教育大学の大学院に入学された先生方も多くおられます。

このように、阿南市と鳴門教育大学は非常に密接な関係ですが、今後とも子どものために、より一層協力していきたいと思っておりますので、どうかよろしくご願ひしたいと思っております。

最後になりましたが、阿南市教育委員会教育長・新居正秀先生をはじめ、本日の開催に向けて準備・運営を担っていただきましたスタッフの皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。今回のフォーラムが参加者の皆さまにとって少しでもお役に立つことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

総合司会（吉本）

山下理事，ありがとうございます。続きまして，本フォーラムの共催者であります阿南市教育委員会教育長・新居正秀さまより，ご挨拶をお願い申し上げます。新居教育長さま，よろしくお願いたします。

【共催者代表挨拶】

新 居 正 秀（阿南市教育委員会 教育長）

おはようございます。本日、「鳴門教育大学教育・文化フォーラム」にご参加ありがとうございます。

この頃，真っ直ぐ歩けなくなりました。歳のせいもあるのですが，本当に暑くて，まだ私タバコを止められなくて喫煙者なんです，市役所は1階の外に喫煙場所が1箇所だけありまして，今私どもがいるのは5階で，5階から降りて1階の端まで歩いて行かなければいけない。「教育長，この頃まっすぐに歩けよらんでよ。フラフラしもって行きよるでよ」と，「夕べも飲み過ぎたんですか？」とかよく言われるんですが，本当に真っ直ぐ歩けないほどの暑さでございまして，今日は朝早くから東の空に稲光が見えましたので，一雨降るのかなあと思っていました，どうやら，猛暑の一日になりそうです。

夏休みに入りまして3週間と言いますか約半分ということで，今のところ各学校から子どもの事故の報告もなく，昨日は電話も殆どなく，佐々木課長とも「こんなにのんびりしていいのかなあ」と，そういう日が続いている訳です。先生方の日頃のご指導に心から感謝を申し上げたいと思います。

6月に入りまして市内の小・中学校，全ての校長先生と面接をいたしました。本年度から教員評価のシステムが変わりまして，教育長が直接，校長と面談をするようにということで，一通り終えたところでございます。人権教育の推進，更に地域を巻き込んだ「生きる力の育成」と「確かな学力の育成」，その2つの項目につきましては全ての校長より力説をされていたところでございます。

そして今年度から，先ほど山下理事さんからお話がありましたように，阿南市では美馬市と同じように「つながルーム」ということで，学力向上につながるサテライトオフィスの設置，それから阿南第一中学校区を拠点とする「徳島県学力・学校力向上支援事業」，それから2年前から始まっております椿町中校区における小中一貫教育「チェーンスクール」，こういった取り組みを始めたところでございますが，これらにつきましても全て鳴門教育大学のご指導を受けてのものでございます。

こういう中，「本年度，阿南市で教育・文化フォーラムを是非どうでしょうか」というお声をいただきまして，迷うことなく手を挙げさせていただきまして本日に至ったところでございます。今回は「地域で考える子どもの学びと育ち－阿南市の実践を通して－」ということでございますが，お話を頂いて4校，私の方で選出をさせていただきました。平成25・26年度の2年間，阿南市教育委員会，学力向上の指定研究を受けていただきました福井中学校，それから小中一貫教育「チェーンスクール」代表の椿町中学校。

さらに，小学校では見能林小学校，皆さん方ご存じのように日曜日に『阿波っ子タイムズ』という子ども版の新聞が折り込まれています。その創刊にあたって大変なご尽力をいただいて，見能林小学校の協力なくして『阿波っ子タイムズ』は創刊できない。それほどまでに，NIE・自主学习ノート等により学力向上に取り組んでいる見能林小学校の稲村先生，それから津乃峰小学校からは石橋ゆかり先生。

石橋先生は，25・26年度に鳴門教育大学で“地域力”をテーマに勉強してきたところでございまして，本フォーラムの主題にピタシだったということで石橋先生を選出させていただいたところでご

ございます。

4校の取り組みにつきましては、色々お聞きになっていると思いますけれども、実際にお話しする、聞くというのは初めての方もいるのではないかと思います。小・中の校種を問わず、阿南市の学校が取り組んでいるその一端を皆さん方と共有いたしまして、各学校に持ち帰り夏休み明けからの学級経営や学校経営に生かしていただきたいということでございます。

それでは、暑い中でございます。また今日の午後、阿南市学校保健会の講演会があり、今日は一日中研修という方もかなりおいでるように聞いておりますけれども、しっかりと拝聴しまして、実りある研修にさせていただければと思っています。どうぞよろしく申し上げます。パネリストの皆さま方、どうぞよろしく申し上げます。

総合司会（吉本）

新居教育長さま、ありがとうございます。

それでは、基調講演に移らせていただきます。「子どもの学びと育ちをつなぐ」の演題で、鳴門教育大学大学院学校教育研究科教授、前田洋一が行います。前田先生の略歴を紹介させていただきます。

前田先生は、金沢大学教育学部を卒業され、その後、福井県の中学校・小学校の教諭として実績を積みまれました。この間、福井大学の修士課程を修了され、福井県の教育研究所、また教育庁に勤められました。平成19年には文部科学大臣より優秀教員の表彰を受けられました。平成22年に鳴門教育大学に着任され、現在、大学院教職実践力高度化コースの教授として教員養成に携わられています。

専門分野は教育心理学・カリキュラム開発・教育工学等の多角的なアプローチからの教育実践力の育成であり、現在は特に学習者の学びと育ちを繋ぐことに焦点化した幼小中高の連携のためのカリキュラムづくりを理論的かつ実証的に行うために地域と密着した取り組みを精力的に実践されています。では、ご講演のほど、よろしく願いいたします。

【基調講演】「子どもの学びと育ちをつなぐ」

講演者 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 前田 洋 一

前田 洋 一（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）

皆さんこんにちは。今日のテーマは「子どもの学びをつなぐ」です。子どもたちの未来は子どもたちがつくっていきますが、未来の様子をちょっと見てみようと思います。

問題は、日本の人口がどんどん減っているということです。人がいなくなるということは、国力が弱くなるということにつながっていきます。例えばこれは阿南市の様子です。1980年には8万2千人いた阿南市が、今は7万3千人ぐらいです。2040年になると5万7千人に減っていくという予想もあります。

ちょっと詳しく見てみると、義務教育に関わる5歳から14歳の人口を見ていくと、減っていくということが分かっていくと思います。だいたい2割ぐらい減っていくのではないかとと言えます。そうすると当然、学校教育ができる範囲も減っていくことになります。こういう現状を踏まえて、子どもたちを育てていくということに対して、教員だけ、学校だけで果たして可能なのかという議論がありま

す。地域で子どもたちのことを考えることが必要ではないかということです。阿南市の椿地区で実施しているチェーンスクール・パッケージスクールもこのことが一番の事の発端です。

さて、もう少し今の世の中についてみていきましょう。今の日本には、エネルギーや年金の問題など解決方法の見つからない問題がたくさんあります。今後、一層、答えの見つからない問題がどんどん出てくるだろうと思います。つまり、どこを探しても解決の方法の決定打がない。あちらを立てればこちらが立たずというような世の中です。何がいいのかよく分からないという不確実性が増しているということです。

そうすると、不確実な社会の中でどのように答えを見いだせば良いのでしょうか。「過去にこんなことがあったからこれさえやっておけばOKよ」では正しくないかもしれません。また、いくら細かく分析してもよく分からない。専門家に聞いてみても、専門家はその知識を持っていますが、答えを生み出してはくれない。この問題にはいろいろな事が複雑に関係し合っているのです。専門家では答えを見つけられない訳です。なぜなら、専門家というのはある特別の領域には答えを持っていますが、「全体の枠組みでどうなの？」と言われると、そのことはよく分からないのです。

そうすると、答えはどうすればいいのかというと、その問題に関して直接的に利害関係を持つ人たちが広く意見を求めて、自分はどうかというのを決定していかなければならない。当然、自分がそれを選べばリスクを取ることもなります。その不利益を生じることもちゃんと考えた上で、きちんと自分の意見を持って生きる力が必要なのだと思います。

もう一つ、子どもたちの未来についての不確実性についてお話をします。アメリカのデューク大学のある先生がこんなことを言いました。2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%ぐらいの子どもたちは、大学卒業時には今存在しない職業に就くだろうということです。アメリカの例ですけれども、日本でもこういう状況は起こり得るだろうと思っています。

事実、周りを見渡しても10年前、20年前にはなかった職業の方がたくさんいらっしゃいます。特に横文字の職業の方がそうです。

学校教育の中で子どもたちに対してどんな力を付けていくかということ、やはり社会に出て役に立てるような力ですが、その子どもたちが大きくなった時の社会をきちんと想定して、その教育をしているかという疑問もあります。

今までだったら「知識を持っていけばいいよ」、と言っていました。これからはコミュニケーション能力とか、独創性とか問題解決とか、やる気とか、そういうようなことが子どもたちには必要だといわれています。事実、いろいろな能力観が示されています。今よく議論されているのは“コンピテンシー”です。ちゃんと知識を持って、実際に行動して課題を解決してき、成果を挙げることのできる力です。

他にも、社会人基礎力とか人間力とかいろいろあります。これらの力は、大まかに言うと3つに分けることができます。

1つは、「集団でうまくやってよ」ということ。もう1つは「自分でやってよ」ということ。もう1つは「基礎的なものは身につけてよ」ということです。この3つの中心にあるのが「思慮深さ」です。先ほどの問題も、解決方法がないのだから、他の人の意見も聞いて、周りの様子も考えて、「あなたならどうするの？」と言われた時に思慮深く考える力が必要とされています。

最近“21世紀型能力”ということも示されました。思考力・基礎力・実践力です。ここでも、実際にやれるかどうか問われています。このように変わっていく時に、学校教育の改善として示されたのが“アクティブラーニング”です。

	PISA コンピテンシー OECD	異質な集団で交流する	自立的に活躍する	相互作用的に道具を用いる	キーコンピテンシー 思慮深さ
		他者とうまく関わる力 協力する力 対立を処理し、解決する力	大きな展望の中で活動する力 人生計画と個人的なプロジェクトを設計し、実行する力 自らの権利、利益、限界、ニーズを守り、主張する力	言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる 知識や情報を相互作用的に用いる	
	国際教育 文部科学省	異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力	自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力		自らが国際社会の一員としてどのように生きていくかという主体性
	グローバル人材 文部科学省 と 経済産業省	チームで働く力 (チームワーク) 多様な人々とともに、 目標に向けて協力する力	前に踏み出す力 (アクション) 一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力	外国語でのコミュニケーション能力	考え抜く力 (シンキング)
		異文化理解・活用力 i) 多様な文化や歴史を背景とする価値観やコミュニケーション方法等の差 (=「異文化の差」) の存在を意識して行動すること ii) 「異文化の差」を「良い・悪い」と判断せず、興味・理解を示し、柔軟に対応できること iii) 「異文化の差」をもった多様な人々の「強み」を認識しそれらを、引き出して相乗効果によって新しい価値を生み出すこと			
	人間力 内閣府 人間力戦略研究会	「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力」	自らそれを継続的に高めていく力	「基礎学力（主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力）」、「専門的な知識・ノウハウ」	「意欲」、「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」などの自己制御的要素
社会人基礎力 経済産業省	チームで働く力 (チームワーク) 多様な人々とともに、 目標に向けて協力する力	前に踏み出す力 (アクション) 一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力	職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力		
国際・経済的視点				考え抜く力 (シンキング)	

では、子どもたちがこのアクティブラーニングを経験するのはいつからだと思いますか？これは幼稚園の子どもたちの写真です。これは、まさにアクティブラーニングです。実際、誰が言う訳でもないのですが、砂場に行って山を作ったり川を作ったり、色んなことをして問題を解いていく。幼稚園で起きているこの動きはよく目にします。誰からともなく「砂場に山を、川を作ろうぜ！」というような問題を自分たちで考えて、自分たちで行動して、大きなジオラマを作り上げています。

つまりこれは、実は幼稚園教育で子どもたちが既にアクティブラーニング、自分たちが行動して問題を解くということを経験している訳です。ところがこれを学習として成立させるには教える側の子どもたちを見る目が必要になります。

つまり、アクティブラーニングとか子どもたちに活動させる時には、それを見ている指導者側の目がないと、その子たちに適切なアドバイスもできないし、評価もできないということになります。動いてしまっている子に、どういう風な視点を持ってこの子たちを見ていくかということが非常に大事になります。

年長さんたちの砂場遊びを見ているとおもしろいことに気が付きます。リーダーがいないのです。誰かが指図をしてやっているのではないのです。自らが自分のできることを考えて、自分でそれを行って、周りの様子を見ながら調整を取り、自分のことを考えながらやっていくというのは、実はもう幼稚園の時代から子どもたちのスキルとしては持っている可能性がある。では、そういう力を“アクティブラーニング”という形で、小学校・中学校・高等学校でどんな風にしていくかというのは、

やはり教える大人側の問題ではないかと思えます。

このような学びの中で、「言葉」というのを非常に大事にしていかななくてはならないと思っています。言葉は、自分をコントロールするためにも必要です。例えば「もうお兄ちゃんだから泣かないの」とか、言葉に出している幼年の子どもたちがたくさんいますが、子どもたちは自分をコントロールする時にも言葉をちゃんと使っています。

つまり言葉というものを大事にして育てていくということが、非常に大事なことです。

今回のテーマである「子どもの育ちと学びをつなぐ」ということに関して、「つなぎ」を妨げる壁は誰が作っているかということです。これは子どもではなく、たぶん大人が作っているのではないかということです。幼稚園と小学校は違うとか、小学校と中学校は違うとか、隣の中学校と私の中学校は違うとかと考えていった時に壁はできてしまいます。

子どもたちは連続したまま大きくなっていく。3月31日に幼稚園だった子が4月1日に小学生になったところで、子どもたちは劇的には変化していきません。子どもたちの育ちはなめらかなのですが、そこに大人が逆に切れ目を入れている。目の前の子どもたちがどんなことを学んできたか。また、この先どんなことを学習していくかも知らない。つまり小学校の先生が幼稚園のことを知らないかもしれないし、逆に中学校のことも知らないかもしれない。中学校の先生は小学校のことを知らないし、高校のことを知らないのかもしれない。

教員というのは目の前の瞬間だけを担当しているだけですが、その子がどこから来てどこへ行くのかということは、やっぱり知っておく必要があると思います。特に、どんな教育を受けてきて、何を考え、何を学んできたかということはしっかり頭の中に入れて、子どもたちに教育をしていく事が必要だと思えます。

それともう1つは、先ほど冒頭で言いましたように、世の中の構造がどんどん変わっていく時に、はたして子どもたちを育てていくということが、学校教育だけで十分かという問題もあります。地域の力も必要ですし、保護者の皆さんの力も必要です。それが影響を与えることはいろいろなデータで証明されています。

そういう中でもう一度、子どもたちの学びと育ちということを考える時に、大人が持っている壁を取り除いて、目の前の子どもたちを見ながら、その子について長いスパンでものを考えていくことが必要だと思えます。それは、地域、保護者の皆さんにしかできない。教育に携わる皆さんにしかできないのです。

子どもたちを育てていくには、長い時間がかかります。ちゃんと力を付けなければならないことも明らかです。だからどんな力をつけることが必要なのか、いつまでに、どうやって、つけていくのかということについてみんなで考えていく必要があると思います。時間になりましたので、私のお話はこれで終わります。どうもありがとうございました。(拍手)

総合司会 (吉本)

前田先生、ありがとうございました。前田先生は、このあと行いますシンポジウムの助言者としても登壇いたします。前田先生へのご質問はシンポジウム後半に、まとめて受付けさせていただきます。

続きましてシンポジウムを行います。会場設営の準備のため、只今から10分間休憩させていただきます。したがってシンポジウムは10時32分ぐらいから始めさせていただきますので、よろしく願いいたします。

……<休憩>……

【シンポジウム】「地域で考える子どもの学びと育ち –阿南市の実践を通して–」

司 会	鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授	太 田 直 也
パネリスト	福井中学校 校長	外 山 永 子
パネリスト	椿町中学校 校長	浅 野 晋 一
パネリスト	見能林小学校 校長	稲 村 健 一
パネリスト	津乃峰小学校 教諭	石 橋 ゆかり
助 言 者	鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授	前 田 洋 一

総合司会 (吉本)

お待たせしました。これよりシンポジウム「地域で考える子どもの学びと育ち –阿南市の実践を通して–」を始めさせていただきます。シンポジウムの司会は、鳴門教育大学大学院学校教育研究科教授、太田直也が行います。太田先生、よろしくお願いいたします。

司 会 (太田)

ご紹介いただいた太田でございます。それでは、シンポジウムを始めさせていただきます。本日は「地域で考える子どもの学びと育ち –阿南市の実践を通して–」をテーマとして、これからの地域で子どもを育てる取り組みについて考えてまいりたいと思います。

それでは、パネリストの方々をご紹介いたします。向かって左から、福井中学校校長、外山永子さまで。外山先生には「生徒の主体性と表現力の育成を目指して –全教職員で取り組む学力向上–」と題し、ご発表いただきます。

お隣が椿町中学校校長、浅野晋一さまで。浅野先生には「椿町中学校区小中一貫教育 “チェーンスクール” の取り組み」について、ご発表いただきます。お隣が見能林小学校校長、稲村健一さまで。稲村先生には「地域の教育力を活かした学びの創造 –新聞活用と自主学習の推進を中心にして–」と題し、ご発表いただきます。

そのお隣が津乃峰小学校教諭、石橋ゆかりさまで。石橋先生には「地域と共に子どもの育ちを考える」について、ご発表いただきます。先ほど基調講演を行いました前田教授には、シンポジウムの助言者として再度ご登壇いただきました。前田先生、よろしくお願いいたします。

それでは、パネリストの先生方には自己紹介も含め、ご発表をお願いいたします。まず稲村さまからご発表いただき、次に外山さま、石橋さま、浅野さまの順でご発表をお願いいたします。なお発表についてのご質問は、4名すべてのパネリストの先生方が発表後、シンポジウム後半にまとめてお受けいたします。

それでは稲村先生、よろしくお願いいたします。

稲 村 健 一 (見能林小学校 校長)

◆「地域の教育力を活かした学びの創造 –新聞活用と自主学習の推進を中心にして–」

失礼いたします。見能林小学校の稲村と申します。普通は並んでいる順番で発表すると思うのですが、なぜか私から発表することになっております。発表時間は僅か12分ですので、ダイジェスト報告になるかと思いますが、よろしくお願いいたします。見能林小学校では、地域の色々な方々のご支援をいただいて学校教育を進めているところですが、素朴ながら、タイトルに掲げたような取り組みに

ついて紹介させていただきます。

「新聞活用と自主学習の推進を中心に」とサブタイトルに掲げてありますけれども、徳島新聞が毎日曜日に掲載しております『阿波っ子タイムズ』の第1日曜版に「子ども記者コーナー」というのがあります。1回につき4校分の記事が出ていると思います。たまたまですけれども、本校がその子ども記者協力校の第1号になりましたので、NIE運動の一環にもなる新聞を使った取り組みについて紹介いたします。併せて、自主学習の推進についてもご報告いたします。

本校では、授業を成立させるための約束として「見小っこ授業のルール10の約束」というのを定めております。目標を掲げるのに10個も欲張りだなあと思うかもしれませんが、一つずつを取って見ると極めて当たり前のことです。1時間・1時間の授業を成立させるための10の約束を校内すべてのクラスで徹底しています。内容としては「時間になったら素早く席に着きます」とか、「椅子に正しい姿勢で座ります」とか、「次の授業が始まるまでに学習の準備をします」とか、できて当たり前のことばかりで、しかも実現可能な目標を10個掲げている訳です。

これに加えて、見能林小学校では、一昨年と昨年の過去2年間、阿南市の「学力向上アクティブ・ワン・プロジェクト事業」を推進し、事業を展開した結果、随分定着を見えています。自主学習の推進については3年目になるのですが、子どもたちに宿題だけで汲々とせず、宿題プラスアルファのなんでもいいから自分でテーマを見つけて、自主学習ノートにチャレンジしてみようということで、1年から6年までの全部の学年に投げかけてみました。

最初は反応はどうか、すぐに乗ってくるかな、食らいつきはどうかと思ったのですが、教師の予想以上に、多くの子どもたちが「自学ノートを頑張ります」という目標を掲げるようになりました。テーマはそれぞれの子どもが自由に選べるのですが、結構オリジナリティも生まれてきています。漢字ばかり並べたり、計算ばかりしたりするのではないかと予想されたのですが、それぞれ多岐に亘る自主学習が展開されています。

この写真は、一人の児童の自学ノートです。個人差はありますけれども、多い子で1年間に60冊というような子も現れています。1年間分のノートを積み上げたらタワーになるので「自学ノートタワー」などと呼んでいます。“継続は力なり”で本当にこういう風に積み重ねていくと大きな成果となっていることがわかります。他の子どもたちの頑張りぶりが参考となるので優秀作を定期的に廊下に掲示しています。子どもたちがそれぞれ他の子どもたちの自学ノートを参照して活かしている風景が見られます。

最初は“宿題以外の学び”といっても、そういう習慣がありませんので、宿題をやれば勉強が終わっていた訳ですが、最初は教師から「自学ノートにチャレンジしよう」と言われても、何をして良いかわからずに手探りが続いていました。けれどもそれを積み重ねていくと、やがて自分なりにどういうことをやればよいかを開拓し、少しずつ内容が広がっていきます。あとでご紹介しますが、新聞記事なども題材にして自学ノートに取り入れている児童も多くなっています。

続いて、新聞を活用した授業ですけれども、特に決まったパターンがある訳ではありません。クラス・学年によって自由に一般紙や子ども新聞等を使った授業がなされています。高学年になれば一般紙を見ないこともありませんが、低・中学年となると一般紙はあまりに距離がありますので、朝日・毎日・読売の各小学生新聞を定期購読しています。これらを授業に活用しているわけです。正面の写真は、そのスナップ風景です。

新聞記事というのは、通常の作文とはまた違いますね。新聞の記事には独特のものがあります。後で申しますけれども、子ども記者活動でも、プロの新聞記者が新聞記事を書くための記者講習をして

くれて、そのノウハウを身に付けてから活動するのですが、センテンスが極めて短い特徴があります。短い中に無駄が全くありません。しかも5W1Hの要素が見事に貫かれています。新聞記事というのは事実の記事が多い訳ですが、事実が的確に表現・描写されていて無駄のない簡潔な内容となっています。

新聞記事の場合は、接続詞がないという一大特徴があるのですが、それはあまり強調していません。けれども5W1H要素が無駄なく簡潔に述べられている点が、のちの作文指導にもつながる良い点だと思います。年間に何度もできるものではありませんが、正面の写真にありますようにテーマを選んで、自分たちで新聞記事を作る試みもやっています。新聞記事を読むばかりではなくて、自分たちで記事を書くという取り組みもやっているところです。

それから、先ほど紹介しました自主学習にも新聞記事を取り入れて、それに対して自分の感想を述べるとか評論をするとか、そういうのも自学ノートに現れ始めています。この写真は、朝日・毎日・読売の各小学生新聞を、低・中・高学年の廊下に常掲しているところです。三々五々と掲示場所で小学生新聞を読むなどして、新聞記事に触れるということが日課になりつつあるところです。

続いて、子ども記者活動ですが、これは小学生ですと5年記者と6年記者がおりまして、見能林小学校は、先ほど申しましたように県内14校ある小学校協力校の第1号になりました。現在では5年記者が6名、6年記者が11名おります。年間に掲載する記事の本数は少しアバウトですけれども、多い年で年間に5本とか6本あり、「年度はじめの4月・5月は記事が出にくいので見能林さん助けて」というようなヘルプコールを受けて、1ヶ月で仕上げたようなこともありましたけれど、記者たちは本当に意気に燃えながら取材し、記事を作っていました。

私が関わっていて一番魅力なのは、原案の“練り込み”作業です。原案は1人とか2人の記者が取材を元に書く訳ですが、その2案とか3案の原案を他の記者が「ここをこう変えればより良くなるのではないか」といった視点で“練り込み”“揉み込み”作業を行うわけです。いわゆる校正作業に当たりますが、これが一番魅力です。

文章表現能力が飛躍的に上がっているなど感ずるところで、私は子ども記者たちの意見を最大限尊重しながら、それをコーディネートしているだけです。そういう“練り込み”“揉み込み”作業をした結果、最終案ができて本社の方に送り込みをする訳です。徳島新聞本社もプロ記者としての手直しはしますけれども、「見能林小学校の場合は完成度が非常に高い」とお褒めもいただいている、大きな励みになっています。それぞれ5年記者と6年記者が年間分かれて取材し、記事作成を行います。

この写真も記者活動の一環です。5年記者と6年記者が一堂に会した場面です。下に映っているのは、マック鈴木さんなんです、ご存じでしょうか。これは、「夢先生」事業の講師としてお迎えしたマック鈴木さんに当時の5年記者たちが取材している場面です。メモ帳片手に記者たちが取材した訳ですが、マックさんもちょっとビックリしていました。でも、快く取材に応じてくれて、『阿波っ子タイムズ』の記事に載りました。この写真は、掲載された『阿波っ子タイムズ』紙面です。

続いて、地域との結びつきを活かした活動実践例に移ります。地元の大規模農園とか、漁業協同組合とか、中林漁港内にある特徴的プラントの塩工房とかに見学に行きますし、地元の商業施設の見学にも参ります。やはり、子どもたちの学びにとって、地域の方々の協力は不可欠です。

これは、見能林小学校が長年取り組んでおります北の脇海岸清掃の写真です。これも地元企業の方と一緒にやっています。30年を超える取り組みになっていると思います。国土交通省大臣表彰も受けています。

それから、地域の高齢者施設「タラサ双葉」に定期的に訪問しておりまして、これは6年生が訪問

して交流している場面ですが、ちょっと出で立ちが変わっていると思います。実は“よさこいソーラン”を施設で踊ったので、こういう出で立ちになっています。

それから幼・保との連携も非常に重要であり、6年生が幼稚園を訪問して交流している場面です。それから、これは避難訓練の場面ですね。地震津波避難訓練に幼・保と合同で取り組み校舎の最上階に避難している場面です。

また、地域に読み聞かせボランティアの「みのりん」という団体があるのですが、毎週金曜日の朝活の時間に本の読み聞かせをしてくれている場面です。子どもたちはとっても楽しみにしていますが、言語力・国語力の向上にもつながっていると思います。この写真はお世話になった方々を招いて感謝の集いをやっている場面です。どこの学校もやっていると思いますが、心を込めてやっているところ

です。
あと1つは去年は「まなびのわ」、今年は「学び支援」事業というのですが、いわゆる“ポジティブ支援”と呼ばれる取り組みを学校全体で取り組んでいます。「静かにしなさい!」とか、いちいち教師は言いがちですが、こんな風にパネルをパッと掲示しますと見事に静まります。ポジティブ支援の一環なんですけど効果を発揮しています。この写真のように集会の時にも「黙って!」というパネルを正面に掲示するだけで、自然と静まることができます。

この写真は、自主学習ノートのタワーですね。一人がこれだけやったというやつです。今後も地道で着実な取り組みを推進していきたいと思っています。もう終わりますが、なぜか魚が登場します。実は私は釣り人でございまして、釣った魚の写真をこのように並べて子どもたちに見せると、「校長先生、1回でこんなに釣ったんですか?」と尋ねるので、「えっどう思ったの?」と問い返すと、「僕だったら5~6回分をまとめて並べたと思いました」との返事です。「そんなことをしたら腐ってしまう。」と答えたところです。それで釣った魚を手作り干物にして、酔狂な校長がPTAのバザーで販売いたしました。これがバザーで大賑わいしている風景です。これはおまけでございました。以上でございます。失礼しました。

司 会 (太田)

続きまして外山先生、お願いいたします。

外 山 永 子 (福井中学校 校長)

◆「生徒の主体性と表現力の育成を目指して－全教職員で取り組む学力向上－」

それでは失礼いたします。福井中学校の外山永子と申します。私からは、「生徒の主体性と表現力の育成を目指して－全教職員で取り組む学力向上－」、福井中学校の取り組みについて発表させていただきます。

本校は平成25年度・26年度、阿南市より学力向上研究指定を受け、まず生徒に付けたい力について教師へのアンケートを実施いたしました。その結果、表現力、家庭での学習習慣が挙げられました。また、自分で判断し行動する力が弱いのではないか、という意見も多く見られました。生徒のアンケートからも話す力、文章で表現する力、体力、世の中の出来事への関心などが挙がりました。

その実態を元に、学力をどう捉えていくか、基盤になることを確認しました。本校は人権劇やスキー・海洋体験などの豊かな体験を通して豊かな人間性を育成すること、部活動や朝練を通して健康・体力を向上させることに伝統ある取り組みを続けている学校です。この豊かな人間性と体力づくりを基盤として継続しながら、確かな学力を育成していきたいと考えました。

これら3つをバランスよく取り組むことで相乗効果を図ることができ、子どもたちの生きる力につながると考えました。学習効率を高める上で重要な学習基盤である授業の準備、課題をしてくる、正しい姿勢、発表の仕方、話の聞き方、ノートを取るなど。また授業に入る前の準備として心を整える、挨拶や早朝読書、場を整える、教室の整頓清掃などですが、学校や家庭の基本的な習慣が、ありがたいことに小学校で身に付けられていました。

そこで、学力の3つの要素のうち、生徒の実態、学校の現状、全国学力調査の結果を踏まえ、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力と、主体的に取り組む態度、この2つに重点を置くことにいたしました。学習指導要領にも言語活動の充実と学習習慣の確立を図ることにより、確かな学力につながると明記されており、この2つを教科の目標を達成する手段として養い、確かな学力をつけたいと考えました。

研究主題を「生徒の主体性を育て、表現力を養う学習指導のあり方」と設定いたしました。言語活動に関する能力の育成を意識した授業実践の積み重ねにより、生徒の表現力を向上させる。読書活動や家庭学習の習慣化を図ることで主体的に学習しようとする意欲を高める。そういう研究方針を立てて主題に迫ることにいたしました。

25年度は“福中方式”と称し、一人1回は研究授業をする、授業の空いている人が見に行く、授業研究会を実施せず掲示板を利用する、という三原則のもとに全教科で言語活動を意識した研究授業を行うことにしました。授業研究会の代わりとして、良かった点や改善点など、色を変えた付箋紙に書き、それを職員室に掲示し情報交換をしました。そして管理職は授業者に直接感想や指導助言を伝えることを基本といたしました。

しかし、付箋紙に記入して読み合うだけでは共有して深化させるという点では弱いのではないかという意見もあり、26年度はこの“福中方式”に加え、講師を招へいして授業研究会を実施することにいたしました。これは研究授業の様子です。全教職員が「言語活動の充実」という共通意識を持って取り組むことが生徒の成長を促すと感じました。

講師を招いての研究授業は、国語・英語・理科・特別支援教育・技術などを行いました。授業研究会では活発な意見交換がなされ、講師の先生から貴重な助言を頂くことができました。この時、思考力・判断力を育成してこそ表現力が育つのだということを示唆していただき、そのことを共有いたしました。

研究授業で授業力を上げていくことはもちろん大切なことなのですが、日々の授業に活かされなくてはなりません。そこで本年度は「福中授業スタンダード」を掲げ、全教員が毎日の授業で実践し定着させていこうと考えました。何をどのように学ぶのか、教師が示す目標の提示や、この授業で達成したいことは何か、生徒が考える目標などがあります。

授業のはじめに、今日の目標を教師が提示します。英語の場合は“Today's goal”になります。下の写真は伊島中が交流会で来た時に、伊島の先生が授業をしてくれた写真ですが、本校の目標カードを使って来ています。いまや阿南市のスタンダードになっていることを実感いたしました。

これは、体育の走り幅跳びの授業ですが、自分で今日の目標を設定しています。自分のフォームを映像で見たり、アドバイスシートを見て観点を選んだり、担任や教師の意見を聞いて自分の目標を設定しています。そしてこの後、個人の目標に応じた練習をいたしました。

これは、ホワイトボードやタブレットを使って説明し、班で話し合いをしています。右の写真は意見を読み合っています。英語で質問され、ホワイトボードに答えを書いています。右は体育でホワイトボードを使って作戦を考えています。このように全ての教科で言語活動の充実と思考を深めるアク

ティブ・ラーニングを取り入れるよう工夫をしています。

ICTを活用した授業も積極的に行われ、視覚的な取り組みや歯切れのよい授業進行など、ユニバーサルデザインの効果を狙っています。昨年度はタブレットも購入できました。記録写真を撮ったり、調べたり、テレビ電話でコミュニケーションをしたり、辞書機能を使ったり、文章を共有化したりと授業の中で活用しています。

これは、国語の授業の評価シートです。相互評価・自己評価、そして最後に学んだこと・工夫したことを感想として書いて振り返ります。毎時間はできませんが、意識して授業に取り入れています。

教科指導の中だけで表現力の育成を図るものでなく、言語活動の素地を養うための実践として、このようなことを行いました。早朝読書や担任による読み聞かせは、1日のはじまりを落ち着かせ、聞くなどの学習態度の向上につながりました。また読書意欲を育むため、「とくしまの子どものためのブックリスト100」の本を廊下に設置しています。昨年度から夏休みに本を3冊読もう！という取り組みも続けています。

また、新聞コーナーの設置によって、全校生徒の80%が「学校で新聞をよく読む」、「ときどき読む」と答えており、身近に新聞がある生活が定着しつつあります。さらに毎週金曜日に「NIE ワークシート」と題し、新聞記事の読み取りとその感想をまとめるという課題を出し、優秀なものを展示、紹介しています。回数を重ねることで論理的な思考力がついてきたと感じる生徒が増えてきました。

短歌づくりは、年2回全校生徒が取り組みます。阿南短歌会に応募し、優秀な作品は廊下に掲示します。短歌で日本語の美しさを発見し、その言葉に気持ちや感情を込めることなどを学習することができました。

「ようこそ先輩講演会」は、伝えることについて本校出身の先輩から学ぶという取り組みです。第1弾の女優・はらまいこさんからは思いを伝える練習方法を教えていただき、一緒にトレーニングをしました。第2弾は人権劇に関わった山田泰史先生です。人権劇への思いや、伝えることの大切さを語ってくれました。

日々の取り組みを大切にすることはもちろんなのですが、生徒たちを大きく成長させてくれる取り組みが人権コントや人権劇です。協力して仲間と練り上げていく姿から、思いを伝えようとする熱意や主体性の育ちを感じることができました。

行事を通して学んだことを伝える掲示からは、互いの感想を読んで新しい発見をするというねらいがあります。また他学年に対して今後の取り組みの予備知識としても役立っています。各教科の足跡の掲示からは友達から刺激を受けたり、次の学習への意欲を養ったりすることができます。階段を利用した掲示は、リズムよく唱え自然に暗唱させたいと考えての取り組みです。曜日、月、七草、音符などが掲示されています。

主体的に学習に取り組む態度の育成として取り組んだことは、自主学習ノートの活用です。決まりは「一日1ページ以上」、これだけですが、学習時間を多くするために毎朝ノートを回収し、学習したページ数に応じたシールを貼っています。そして効果的にまとめられたノートを毎月のチャンピオンとして掲示し、紹介しています。「一日1ページ以上」は全員が実施できています。ひと月に3冊以上のノートを使う生徒もいます。また付箋を貼り繰り返し学習したり、定期テストに利用したりする工夫も見られてきました。

年度末に、生徒に付いてきた力のアンケートを取りました。生徒・教員、両方から挙がった力がこれです。文章を書く力は、その根拠に「NIE ワークシート」を挙げる生徒が多かったです。他に、読み取る力、まとめる力、話す力を挙げています。家庭学習の時間や自主学習ノートの量も増加し、学

習意欲も高まってきています。

このように、福井中学校では豊かな人間性、体力づくりを基盤とし、全教職員が主体性と表現力を育成していくことで確かな学力につなげてきました。これからも継続して全教職員で学力向上に取り組んでいきたいと思っています。

司 会 (太田)

次に石橋先生、お願いいたします。

石 橋 ゆかり (津乃峰小学校 教諭)

◆「地域とともに子どもの育ちを考える」

失礼します。阿南市立津乃峰小学校の石橋ゆかりです。昨年度まで教職大学院でお世話になっておりました。本日は、その時の実習校としてお世話になった前任校での取り組みも合わせて発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

「地域とともに子どもの育ちを考える」、今情報化社会・消費社会の成熟とともにグローバル化・知識基盤社会化・少子高齢化が進んでいます。そのような社会において、人間関係の希薄化が大きな課題となっています。様々な理由で人との関わりが少なくなった今、子どもが人と関われる場を周りの大人が作っていくことが必要ではないかと考えました。

そこで、私は人との関わりを地域の中に求め、子どもたちが身近で多様な人と関わり、共に課題を解決していくことを通して、これからの社会に必要な知識・能力を高めて欲しい、そして地域や人に愛着を持つようになって欲しいという思いを持って実践を進めてきました。

ここから、2つの実践を報告させていただきます。これは前任校での実践で、当時5・6年生14名で行った総合的な学習の時間における取り組みです。町の元気発信隊プロジェクトとして、町を盛り上げるために自分たちにできることを考え、直売所で販売活動を行い、町のアピールをしていこうとする地域貢献活動です。これは、直売所の方の「地域を活性化したい」という思いと重なった活動でした。今回は販売活動に関する内容に絞って紹介させていただきます。

子どもたちは、直売所での販売に向けて野菜づくりや直売所リサーチを行い、色々な材料を集めていきました。休日には、意欲的に直売所へ下見に行く姿が見られました。集めた材料を元に自分たちで交渉をしたり、直売所の方に色々と教わったりしながら、より良い方法を考えていきました。一人で考え、仲間と対話を繰り返し、ともに考えを作り出していきました。相手の気持ちを考えながら販売当日をイメージして話し合い、お客さんに喜んでもらうにはどうしたらいいのか、自分たちの言動で町のイメージが変わるんだということも考えていきました。

販売当日。ふかし芋を作るために硬いさつまいもを切っていた子どもは、「先生、手が痛いですが、でもお客さんの笑顔のためにがんばります」と自分に言い聞かせ切り続けました。会計係の子どもは、「お釣りが間違っていない？計算、もう一回してみよう。」と、何回も確認していました。相手の気持ちを意識した姿がたくさん見られました。中には人と関わるのが苦手な子どももいて、「話し掛けるのは苦手だなあ、ドキドキする。でも友達や先生が応援してくれてるし・・・。」と、時間を掛けながらも自分から話し掛けるタイミングを計っていました。

しばらくして「やった、できた！」やっとの思いで、自分から話しかけることができたのです。しかもこんなに素敵な笑顔で。彼女はその日の思いを日記に書き留めていました。題は『絶好調!』です。「私は話し掛けたり大きな声を出したりするのを少しだけできました。本当に本当に少しだけ、

私の中ではとても頑張りました。」この日記の中に、彼女の自己肯定感の高まりが見えました。そして、それは夏に行った自尊感情測定尺度を用いたアンケート結果にも大きな変容が表れていました。

これらの活動のあとには、必ず振り返りをします。販売活動だけではなく、栽培活動を通して、一緒に活動して経験や知識や力となったこと、専門家とつながって関心が高まっていったこと、そして関わりを積み重ねることで人とつながる良さを感じたことを子ども自身が振り返りました。そして、自分の変容を書き出す中で、事実に基づいた根拠を書くことにより、自分の成長がより確かなものになっていきました。

これは思考ツールのクラゲチャートを活用したワークシートです。「私は成長した」という主張のもとに、それらの根拠が並べられています。そして、その根拠を支える事実が書かれています。この一連の作業を通して子どもたちは自分の成長を確かなものにすることができるのです。その中には、「前より地域が好きになった」「信頼されるようになった」、「前向きに頑張った」「自分から話し掛けるようになった」などという根拠が書かれていました。

子どもたちは、これらの活動を通して信頼感を得、人と関わる良さを味わい、地域に愛着を持ち、自己肯定感を高めることができました。その子どもたちは学校生活の中でも折り合いをつけながら人と上手くコミュニケーションを取ろうとしたり、地域や人や自分の仕事に愛着を持って行動したりできるようになってきました。そして、何か問題があっても自分から関わり、解決に向かおうとする主体的な姿が見られるようになってきました。

しばらくして、子どもたちが私に話し掛けてきました。「先生、今度野菜コンテストするらしいですよ。」「先生、瀬戸内塩サイダーすごく美味しいです。来週、入荷予定なんです。」「えっ、なんで知ってるん?」「実は今も直売所へ行ってらんです。だから教えてくれたんです。」

子どもたちは学校での活動が終わっても、地域の人とつながっていたのです。このように自己肯定感が高まり、人や地域への関心・愛着・信頼を感じることができた子どもは、自ら人や地域と関わっていくようになりました。

次は、現任校での実践です。「地域とともに育つ学校～防災に強い学校をめざして～」

本校の正門を入ると3本のソテツがあります。これは昭和60年に津乃峰分校から独立した時に移転したものです。開校宣言から、この3本のソテツは学校・家庭・社会を表すとされています。それから三者の連携による学校づくりが始まったのですが、時代の流れとともに、生活形態などの変化により今地域住民のつながりが薄れつつあります。

そのような中、本校には子どもたちのために支援してくださっているボランティア団体が複数存在します。皆さん、子どもが健全に育ち、地域に愛着や誇りを持って欲しいと願い、支援してくださっています。『答島21世紀会』の皆さんは、昨年度、文部科学大臣賞を受賞しました。毎日の登下校指導をはじめ、教育のサポートや学習支援、環境整備など、様々な分野で支援してくださり、毎日のように子どもを見守ってくださっています。そして、教師は子どもと地域の方々との関わりを意味付け、学級や学校で共有するようになってきました。

このような活動の積み重ねによって、地域との連携の土台が構築されてきました。今、学校は次のステップとして連携を広げ、深め、さらに地域コミュニティを強化していこうとしています。

まず就学前・小の連携として、1年生と津乃峰保育所の園児が交流学習をしました。自助を意識付ける啓発活動を行い、子ども同士のつながりを作るきっかけもできました。

保護者との連携としては、このような取り組みを行っています。保護者との連携を広げ、深めながら、子どもたちも防災学習の積み上げを行っています。このように子どもの学習と連携をリンクさ

せることによって、子どもが学ぶ姿を通して、保護者との連携が次第に高まっているのを感じました。今年6月の授業参観の後に行われた『全校防災活動の飛散防止フィルム貼り』では、約120名の保護者が集まり、例年よりも数倍多い参加率に驚きました。このことから、子どもの命を守るという1つの目的に向かうことがもたらす力を実感することができました。

保護者・地域との連携としては、講師先生、保護者、地域の方々、教職員が一緒になり、津乃峰町の防災・減災について話し合う機会を定期的に設けています。子どもの避難経路を話し合う時には、「安全に行くんやったら、こっちの道がいいんちがうかな。」という意見が出されて、子どもの命を守るために真剣に考えている地域住民の方の姿を見ることができました。

本校は、地震が起きて約20分弱で津波が到達すると言われていました。そこで、今年の4月に、阿南市・海部観光・津乃峰町自主防災会・津乃峰小学校PTAの4者による協定を結び、海部観光の内原車庫が第3次避難場所となりました。今子どもたちはバスでの宿泊疑似体験や避難所への避難訓練を行う中で、命を守る技を身に付けながら“安心できる町”を実感しつつあります。

このように、防災に強い学校をめざした連携を通して、それぞれに変容が見えてきました。学校では学校長のリーダーシップのもと、1つの目的に向かって教職員の協働が生まれています。そして、学校・家庭・地域の連携が急速に深まっているのを感じます。それは、全ての者が切実に思う「命を守る」という課題だからこそ、地域をさらに知り、人とつながり協働しようとしているからだと思います。また、学校から、地域へ出向いたり、ホームページや学校通信等によって情報発信したりする影響も大きいと感じています。しかし、まだまだ十分な連携とは言えません。今後も子どもの命を守るために、そしてみんなで生きるためにさらに連携を深め、地域コミュニティを強めていきたいと思っています。

2つの実践から、地域の歴史や文化が違っていても、子どもの育ちを中心に考えることで学校・家庭・地域はつながることができそうです。子どもは地域へ出向き、地域や人と関わり合うことによって、地域や人に対し信頼や愛着を持つようになっていきます。その中で、子どもが活動する姿や成長していく過程を周りの大人たち・地域の方が見ることによって、連携はさらに深まっていくと考えます。

そのような実践を積み重ねることで、子どもたちは様々な資質・能力を身に付けながら、地域を大切に、地域のために行動するようになっていきます。地域に根づく子どもを育むためにも、今後も子どもの育ちを中心に据えた連携や実践を考え、周りの人と協働しながら取り組んでいきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

司 会 (太田)

では、最後に浅野先生、よろしくお願ひいたします。

浅 野 晋 一 (椿町中学校 校長)

◆「椿町中学校区小中一貫教育“チェーンスクール”の取り組み」

それでは失礼します。実践報告のトリをとることになりましたが、椿町中学校の浅野です。私は2年前まで徳島県で離島の唯一学校がある伊島中学校に勤務しておりましたが、縁あって昨年、連絡船でいつも椿泊・蒲生田を見ていた、そこを校区とする椿町中学校に赴任しました。時々、懐かしく椿の方から島の方を見ている訳なんですけど、今日は椿町中学校区の小中一貫教育についての取り組みを発表させていただきたいと思っています。

私の勤務する椿町中学校区には、僻地1級指定の椿泊小学校と椿小学校の2つの小学校があります。

現在、生徒数は21名。うち椿小学校出身は10名、椿泊小学校出身は11名という小規模校であります。平成10年には小・中学生合わせて206名いた児童生徒が、平成20年には102名となり、今年度27年度は53名にまで減少しています。少子高齢化や都市部への人口集中による地域の過疎化が進み、学校の小規模化、学級の少人数化による教育への影響が椿町中学校の位置する椿・椿泊地区の課題となっています。

椿泊小学校は紀伊水道に突き出た岬の突端に位置しており、周辺には民家が集まり、漁業を中心として生計を立てています。学校に辿り着くまでには曲路の多い極狭路を延々と進まねばならず、その道は軽自動車が入りやすいような、タクシーでさえ進入を拒否する道です。学校を統廃合するとなれば保護者の車による毎日の送迎を前提としなければならず、運転免許証のない保護者もいることから、学校の統廃合は現実的に不可能であると考えています。児童数が減少したからといって、他校と統合し、スクールバスで児童が通うことはできないため、学校の存続がどうしても必要となってきます。

そこで阿南市教育委員会のご理解とご支援のもと、地域コミュニティの拠点である学校の存在意義を考えながら、在籍児童生徒が減少しても学校の統廃合ではなく、教育活動や学校間連携の工夫により、学校を維持しながら学校教育を推進していくことが、子どもにとっても地域にとっても最も望ましいと考え、2年前から小中3校で小規模校のメリットを最大限に活かし、デメリットを最小限に抑えることにより、学校の存続、活性化を図ることを目的として、学校間ネットワークの構築による分散型小中一貫教育“チェーンスクール”を実施し、教育の質の保証に取り組んできました。

チェーンスクールとは、地域に分散する複数の小規模校が人的・物的資源を相互活用しながら、多様な学びを保証する分散型小中一貫教育を言います。その結果、小規模校では集団活動・集団行事の教育効果の低下や、協働的な学びの実現の困難さが生じるといった課題は、このチェーンスクールの取り組みにより、大きな集団が形成させることで集団活動や集団行事の実施が可能になり、教育効果の維持・向上や協働的な学びの実現が図られてきました。

また、小規模校の課題の1つである人間関係の低下についても、校種を超えた人間関係の広まりが見られ、人間関係構築力やコミュニケーション力の育成が図られてきました。また学校間ネットワークの構築をしていくことにより、小規模校では上級生・下級生のコミュニケーションが少なくなったり、学習や進路選択の模範となる先輩の数が少なくなったりするという課題も克服されてきたように思います。更に地域社会と連携した取り組みを進めてきた結果、社会性の育成についても大きな進歩が見られているように思います。

これまでの2年間の取り組みは、児童・生徒にとって効果があると思われることを色々と考え、取り組んでみるといった段階でありました。そして成果が見られた一方、多くの課題も見えてきました。例えば合同授業・合同行事のより効果的な実施のあり方について、児童生徒の学力およびコミュニケーション力の更なる向上を図ること、児童生徒の移動に伴う時間の確保、またそれに伴う各教科の年間授業時数の確保について、教職員の打ち合わせ時間の確保について、人材等の相互有効活用について、といった課題です。

こうした課題を克服するためには、チェーンスクールの取り組みをより一層充実したものにして、小中一貫した教育課程の編成をはじめ、これまで取り組んできた学習や活動について、内容や計画性・系統性の面から検討を行い、これからの取り組みがより効果的なものになるようにする必要があります。

そしてまた、地域コミュニティとして構築された学校間ネットワークは、その地域の特性や教育力、

自然環境を活かした取り組みや地域からの支援・協力によって、より確かなものになってきたという経緯があって、これからも地域と連携した取り組みにより、児童生徒のふるさとを愛する心、地域の一員としての自覚、地域の発展に貢献しようとする実践力を育てていきたいと思っています。

そのためには、地域にはまだまだ学校教育の活性化に寄与できる教育資源がたくさんあると考えています。チェーンスクールの取り組みを進めながら、人的・物的・環境的な地域の教育資源をより一層活用することにより、学校教育活動の活性化、開かれた学校づくりを図りたいと思います。

それでは、最後に昨年度、チェーンスクールの取り組みの中で堀内佳さんの人権コンサートを行ったのですが、その時に児童生徒による作詞、そして堀内佳さんが作曲をした『みんなの椿町』、小中一貫教育のイメージソングになったのですが、その歌を聴きながらチェーンスクールの取り組みをスライドで見たいと思います。

この『みんなの椿町』は、合同学習等を行う時に必ず歌を歌ってから行うようにしております。1番の歌詞は椿小学校、2番の歌詞は椿泊小学校、3番の歌詞が椿町中学校の児童生徒が作詞をしました。それではスライドを見ていただきながら、これで私の発表を終わりたいと思っています。

♪『みんなの椿町』……（約4分間）

ありがとうございました。（拍手）

司 会（太田）

パネリストの先生方、ありがとうございました。ここで会場の皆さまから、ご発表いただきましたパネリストの先生方、それから基調講演を行いました前田先生へのご質問・ご意見をお受けしたいと思います。ご質問やご意見がございましたら、手を挙げてください。スタッフがマイクを持ってまいります。まず所属と氏名を仰ってから、ご発言をお願いいたします。それでは、質問がある方は挙手をお願いいたします。

参加者 A

本日はありがとうございました。最初に見能林小学校の校長先生、稲村先生が“地道”というお言葉を何度か使われたと思うのですが、地道だけれども大切だなあと思わされるようなことであるとか、また福井中や津乃峰小は大変斬新な取り組みがたくさんあって大変参考になりました。新聞・NIEとか自主ノートとか、共通の取り組みもあったようですので本校でも参考にさせていただきたいと思いました。

今日の「地域で考える」というテーマでいきますと、椿町の現状を今少し見せていただいて、大変深刻な課題を突き付けられたような気が致しました。最後に椿町中学校のチェーンスクールということで、イラストが流れて色々見せていただいたのですが、サーッと流れたのですが大変興味深い取り組みがいくつかあったようなのですが、何か今サーッと流れた中で浅野校長先生の方から、具体的にこんな取り組みが有効的であったとか、今後こうなんだというようなものがもしあれば、何か教えていただきたいなと思います。よろしく申し上げます。

浅 野 晋 一（椿町中学校 校長）

ありがとうございます。時間の都合で具体的などころがあまり発表の中でできなかったのですが、

具体的な取り組みで少し、ということで、過去に取り組んだ中で一つ、これは椿泊小学校の校長先生から絶えず「よかった！」と言っていたのですが、小中一貫の行事の中で体力テストを各小学校がやっているのですが、それを合同でやりました。

人的なこと、物的なこと関係するのですが、泊小学校は50メートルを走る距離がないというところで、中学校に集まって小学生と中学生が一斉に体力テストをやったのですが、大勢の中で50メートル走ができたこと、こういったところでも非常に取り組みの効果があったというか、ありがたいなあという言葉も言っていただきました。

また、今年度の取り組みとして2点、話をさせていただきたいのですが、新たな取り組みとしまして先ほど稲村先生からも発表がありましたNIEの新聞を活用しての取り組みが、私の学校でも実は4年前、2年間の市の指定、それから県の指定も2年あって、去年全国大会で一部発表もさせていただいたのですが、このNIEの取り組みが学校としては非常に学力をつけていく面からも効果があったと考えております。そういうところを、やはり小学校の方にも降ろして行って、9年間を見据えたNIEの取り組みを今年からやっていきたいと思いますかというようなことで、NIEの活動に取り組んでいこうとしております。

それから、これは今年また小中一貫教育の指定も県の方からもいただきまして、県の補助金を頂きまして「テレビ会議システム」というシステムを、10月に設置する予定でおります。このテレビ会議システムを活用して、もちろん合同授業、子どもたちが移動せずに3校で一斉に合同で授業を行うということはもちろんですが、あと先ほど課題にもあったように先生方の打ち合わせする時間というか、そういったところもテレビ会議システムを使ってスムーズな打ち合わせができると考えています。

また研修も、中学校に集まって研修をしているのですが、それを各学校でテレビ会議システムを利用して研修をして、子どもたちの成長というか小中一貫教育の推進につなげていこうというような考えであります。そういう取り組みを考えています。

司 会 (太田)

ありがとうございました。他に質問がある方、いらっしゃいますか。

乾 和 彦 (津乃峰小学校 校長)

津乃峰小学校長の乾です。質問ではないのですが、本校の石橋教諭の報告に対して、補足説明をさせていただきます。

私が1年前に津乃峰小学校長に赴任した時、様々な方から声を掛けられました。「津乃峰小学校は大変じゃなあ。ご苦労様」という声掛けでした。本校の教職員も同様の声掛けをいただいたと聞いています。この言葉掛けから、子どもの実態以上の噂が世間に飛び交っていると感じました。そのためか、4月当初の保護者や地域の皆様からの学校に対する目は非常に厳しいものでした。また、子どもたちも自分に自信が持てず、自尊感情が全く育っていない状況でした。

そのような現実を打破するために、学校の取組として、子どもたちに自尊感情を取り戻す場を多く提供し、その活動の様子を学校ホームページや津小便りで、保護者や地域の皆様にどんどん発信していきました。子どもたちの活動の様子は何度か新聞紙にも取り上げられました。このことにより、子どもたちの自尊感情は大きく育ちました。また、保護者や地域の皆様の学校に対する評価も厳しい目から温かい目へと大きく変えることとなりました。

これらの取組が、今年度の活動につながっていく訳です。昨年度までの授業参観の後の学年別

PTA ソフトボール大会では30名程度しか保護者が残っていませんでしたが、今年度は授業参観の後に教室のガラスに防災フィルム貼りを行いましたが、120名の保護者の参加者がありました。今年度は実践的防災教育に取り組んでいますが、保護者や地域の皆様方との連携が深まりつつあります。

最後に、前田先生に質問ですが、ご講演の中で、「学力の高い子どもたちの家庭環境」のデータとともに、親の経済力と子どもの学力が密接に関係している時代となったとお話がありましたが、低学力の子どもたちが親の厳しい経済力に起因している場合、学校としてどのように家庭や地域と連携すればよいのか、アドバイスをいただきたい。

前 田 洋 一 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授)

ご質問ありがとうございます。家庭がなかなか厳しい状態にある子どもたちに、どうすれば良いかというお話なのですが、実はここに書いてあることは「現象としてそうなっている」ということを記述してあります。

かつてある大学が、「効果のある学校」というのを調査をして、いろいろなことが提案されました。しかし、厳しい状況にある学校が成果を挙げている例をよくみると、実際、そこで頑張っている先生がいたということに集約されることがわかります。

家庭と連携をとるために、先生一人ひとりが夜でも家庭訪問をしているとか、きめ細かな活動があったからこそ、効果のある学校として成果を挙げることができたと言うのが本当のところだと理解しています。実際、成果があがるまで、学校と家庭と一緒に、子どもの成長について具体的に考え、議論してきたかということが形として表れるだけだと思います。一人ひとりの先生たちが親身になって家庭と連携を取りながらやっている状況が、成果につながっていると思っています。

それで、ある指標を見ていけば、家庭の教育力の低い家庭に対して特効薬というのはなかなか難しい。だけど、やはり先生と保護者の皆さんが目の前の子どもたちについて少しずつ関係性を保ちながら、子どもを育てていくことについて議論を重ねていくという地道な取り組みしか解決法はないと思っています。

なかなか方法で「こういう風なものがありますよ」という特効薬的なものは示せないのですが、やはり、現場で頑張ってらっしゃる先生の力が、家庭に対しては一番力を発揮するのではないかなと思っています。ありがとうございます。

司 会 (太田)

ありがとうございます。更に質問の時間を取りたいのですけれども、予定の時間が近づいてまいりました。質問を受けてパネリストの先生方に、最後に一言ずつお願いいたします。並びの順番でお願いいたします。外山先生から。

外 山 永 子 (福井中学校 校長)

本日はどうもありがとうございます。福井中学校の取り組みをしてまいりまして、確かな学力をつけていくために豊かな人間性や体力づくり、これはやっぱり3つとも頑張っていくことが子どもたちに力をつけていくことになると思います。実際、人権劇で自分の演技とか発信力に自信を持った子どもたちが、学力が向上したり、部活動で輝いた子どもたちが、また勉強の方でも輝いたりしたこともありました。

本校の小規模という利点を活かして、一人ひとりが輝く福井中学校を目指して、これからも頑張っ

ていきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

浅野 晋一 (椿町中学校 校長)

ありがとうございました。椿町中学校の方に勤務して、今まで何校か学校に勤務した訳ですが、私の学校の職員室が非常に明るいです。そして多くの子どもを中心とした話題が毎日のように飛び交っています。情報は職員室に色々ある訳ですが、私も校長室にいるよりも職員室に行って先生方からの情報をたくさん得ております。

色々会話がある中で、一つ「違うな」と思うことがあるのですが、それは今まで私が勤務した学校、中学校ばかりなんですけれども、その話の内容というのは子どもを中心とした話ですが、私の学校は子どもを中心とした話には変わりはないのですが、小学校の子どもたちの話題、小学校のことが話題に上ります。

つまり、当たり前なことなんですが一貫教育、連携をしていく中で、先生方が小学校を意識している。子どもたちの話の中に小学校の話がよく出てくる訳ですね。これは小学校の職員室でも中学校のことが話題になったりしているんじゃないかなと思っています。連携教育、一貫教育、つまりまずは教職員が連携をして、そして子どもたちをどう育てたいのか。

その辺りがこれからももちろん大事なことだと思っていますし、更にそれを一つ伸ばしていくと、今度は「地域の中の中学校」と考えた時に地域との連携というのも考えた上では、先生方の中に地域を意識したそういう話題がこれからまた多く登場してくれたら、また地域の中の学校として頑張っていけるのではないかなあとと思っています。ありがとうございました。(拍手)

稲村 健一 (見能林小学校 校長)

見能林小学校でございますが、今日は取り組みのほんの一端をダイジェストでご報告したにすぎません。これらの取り組みというのは教職員全員の力を結集して進めたものです。一人や二人がいくら孤軍奮闘しても進みません。教職員総体というんでしょうか、そういう力が一番大事だと思います。“ローマは一日にしてならず”という言葉があるように、一日一日の前進というのは僅かかもしれませんが、それを1年間積み重ねていくと大きな力になるというのを実感しています。

あともう1点、今日の大きなテーマにもつながりますが「連携」ということです。教職員ほど連携という言葉が好きな職種の人はいないと思うのですが、学校・家庭・地域の連携とか校種間の連携とか、耳タコ状態でよく語られるし、自分たちも使いますよね。けれど、その実が上がっているのはやたらお目にかかりません。

教職員は多忙です。現場の多忙感はもう本当にピークに達していると思うのですが、それぞれの校種で自分たちがやらなければならないことが山ほどある中で、連携は大事だけれどやろうと思うと余分のことですよ、エネルギーが要ります。通常の教育課程にない訳ですから。でも、とても大事なことなので、時間をこじ空けてやっていくと、子どもたちに成果が反映されます、間違いなく。ですから、「連携、連携」と口三味線だけでなく、如何に一つずつ実践していくかということが我々教員に突き付けられていると思います。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

石橋 ゆかり (津乃峰小学校 教諭)

今日はたくさんの方を教えていただきありがとうございました。今、「連携」という言葉が稲村校長先生の方からありましたが、地域によって文化や歴史に違いがあるように、それぞれの地域で育

つ子どもたちにも違いがあります。さらには、一人一人の子どもが持っている背景も様々です。

そこで、「連携」をするのはどうしてかと考えた時、私は地域の子どもがどのように育てて欲しいのかを考え、それを実現するために「連携」があり、それが本当の「連携」だと考えています。津乃峰町の子どもたちは、厳しい背景を持っている子どもが少なくないので、その子どもたちがいかに楽しく学校に来られるか、将来自立できるようになるのかということを学校・地域が考え、連携していくことが大切だと思っています。

私は、人との関わりによって子どもは生きる術を学んでいくと考えています。世の中には同じ人は一人といませんので、人とつながることによって「この人からはどのようなことを得るのか」、知識や技能だけではなく生き方を学び蓄えていくことで、子どもたちがこれから先、どんな困難な問題に出合っても、自分で考え解決していけるようになると思います。もし、挫折をした時には、周りに大人がいますので、大人が再生する術を教えてあげたら良いと思います。

私は、教職大学院でお世話になった2年間で、現場では経験できないことをたくさん経験し、大きな学びを得ることができました。しかし、その中で、大きな挫折も経験しました。今までにない挫折を経験した時、私の自尊感情はゼロになりました。子どもは、必然的にいる周りの大人たちによって、自尊感情を高めてもらうことができます。しかし、大人は、そうではありません。自分からつながりを作らなければ、自分に関わりを持ってくれる人は子どもの時ほど多くはないと思います。私は自分の挫折を機に、大人の自尊感情を高める方法について考えるようになりました。でも、一人で自尊感情を高める最適な方法はないそうです。

やはり、職場の同僚の支えによって高めていくしかないということをお話いただきました。そして、自分をダメな人間だと思わないこと、失敗したことだけを反省すればよいということでした。

ですから、子どもたちには多様な人から色々なことを学びながら生きていく術を身に付けていって欲しいと思います。そのためにも、私たちは、子どもを中心とした連携を考え、家庭や地域とともに実践を積み重ねていきたいと思っています。

今日はたくさんのお話を学ばせていただき、またこれからも皆さんと一緒に勉強できる機会があればと思っています。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

司 会 (太田)

ありがとうございました。それでは助言者の前田先生から、ご意見・ご感想をお話しいただきたいと思っています。前田先生、お願いいたします。

前 田 洋 一 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授)

皆さんの取り組みを見ていて、教育は子どもたちが変われることを教えていくことだとあらためて実感しました。

皆さんのベースにあるものは人を変えていこうとする人たちは自分を変えることを厭うてはいけないということをお話聞いて分かりました。学校教育で何が大事なのだろうという本質的な問いに対する答えを今日提示していただいたと思っています。

阿南に少し関わることができて、本当に自分も楽しみにしています。学力向上とか、チェーンスクール・パッケージスクールとか、本当に阿南の先生たちのご活躍を期待しておりますし、微力ですが我々鳴門教育大学も一緒にやって行ければと思っていますので、今後ともどうぞお願いいたします。感想ではなくお願いになりましたが、どうもありがとうございました。(拍手)

司 会 (太田)

ありがとうございました。ここで予定の時間となりました。本日は短時間ではありましたが、実のある討論ができました。パネリストの先生方、会場の皆さま、ご協力ありがとうございました。それでは総合司会にマイクをお返しいたします。

【閉会式】

主催者代表挨拶 鳴門教育大学 理事・副学長 山 下 一 夫

総合司会 (吉本)

ありがとうございました。本日のパネリストの先生方に皆さま、もう一度大きな拍手をお願いいたします。(拍手) それでは、閉会にあたりまして鳴門教育大学理事・山下一夫からご挨拶申し上げます。

【主催者代表挨拶】

山 下 一 夫 (鳴門教育大学 理事・副学長)

時間もありませんので、お一人お一人にお礼を述べたいのですけれども、申し訳ありません、割愛させて下さい。実は、あれもこれも話したいのですが、ポイントを1つだけ話させていただきます。私が今日一番全体として感じたことは何かというと、この阿南の豊かな文化ということです。そして、それを大人から子どもへ伝えられている、まさに教育しているということを大いに感心しました。

非常に唐突なんですけど、大宜都比売(オオゲツヒメ)、皆さんご存じだと思うんですけど、この大宜都比売を私は思い浮かべて今日のフォーラムをずっと聞いておりました。大宜都比売とは一体何かというと、古事記の中に出て来る神様です。古事記では最初に“国生み”がありまして、淡路島が生まれるんです。そして二番目に、我が四国ができる。

それで四国は何かというと、身が一つで面(おも)、つまり顔が4つあったということです。そして、その顔ごとに名前があり、伊予の国は愛比売(エヒメ)といいます。讃岐は飯依比古(イイヨリヒコ)、土佐は建依別(タケヨリワケ)、そして我が粟の国、阿波国は大宜都比売だということです。大宜都比売はどのような神様かということ、穀物、食べ物の豊かな神様であり、地母神、大地の母なる神なんです。

私は鳴門に20年以上住んでいます。しかし、鳴門は大好きなんですけれども、大宜都比売とはちょっとイメージが違うなあというように思っていました。それが今日、阿南に来まして、ああ、ここぞが徳島の大宜都比売の本当の中核のイメージの所だというように思いました。非常に豊かで、温かい。そして、人を育てていく、支えていくというようなイメージを、私は今日、聞いていて感じました。

しかし一方、津乃峰小学校の乾校長先生が言われたように、阿南にも課題はいっぱいあるでしょう。あるいは非常に多忙である世の中、情報化、少子化、不確実な社会にあって、この大宜都比売のような豊かな阿南の文化を活かしながら、何かプラスアルファをこの教育の中に取り入れていかなきゃいけない時代だ、というように思いました。これは夏休みの大きな宿題ではないか、と私自身思いました。

そして、私だけではなくて本日参加された阿南の先生方も情報を共有して、そして何か日々の授業に役立つことがあったことだと思います。と同時に、ご自身にとって振り返ること、何か課題という

ことも気付かれたのではないのでしょうか。

閉会の挨拶が、いつの間にやら授業みたいになってきましたので、この辺で話を閉じて、本日の教育・文化フォーラムを閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

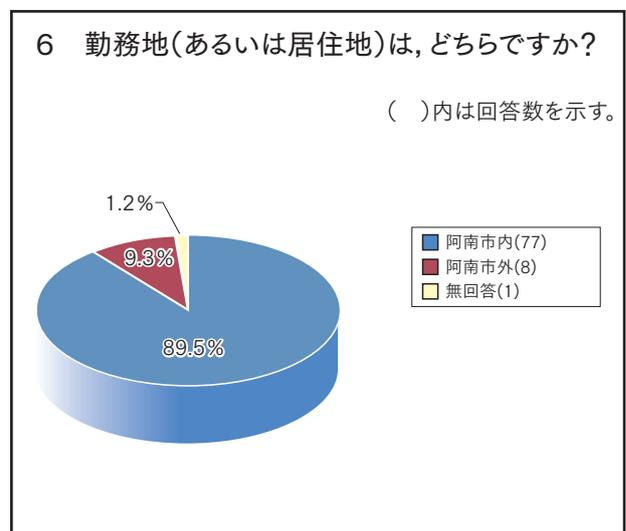
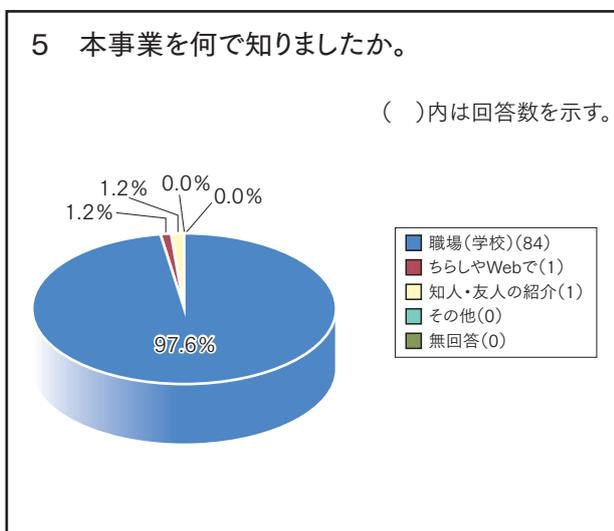
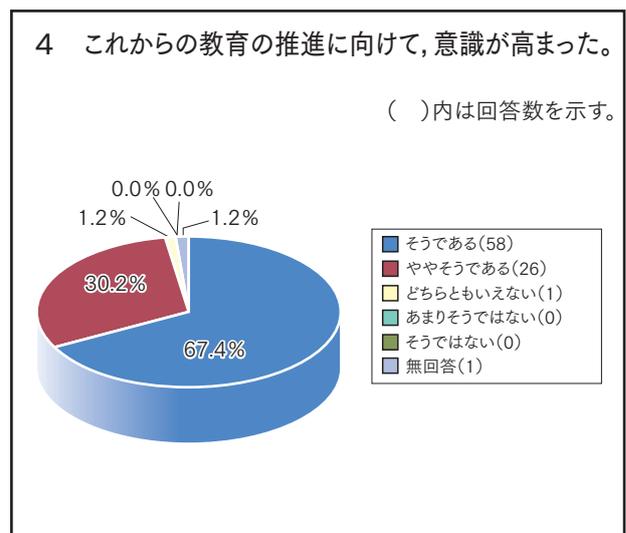
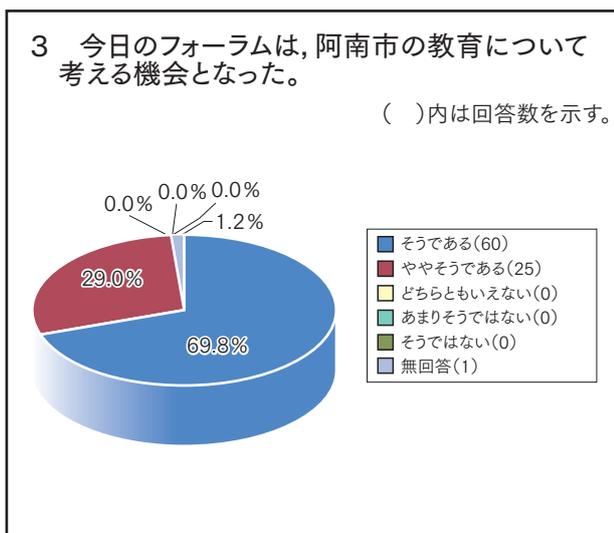
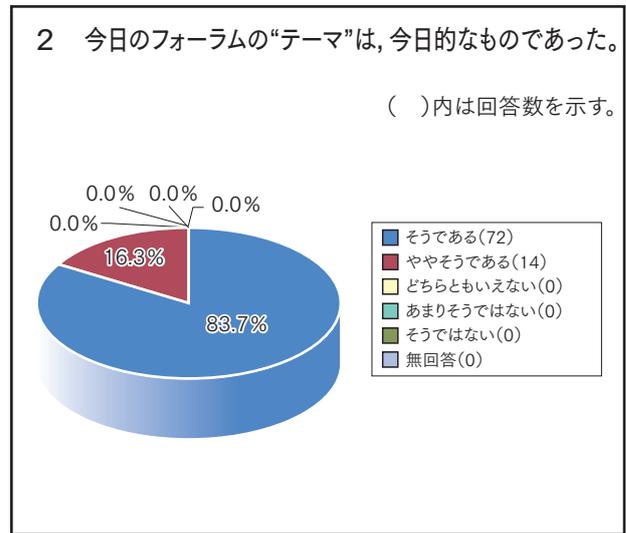
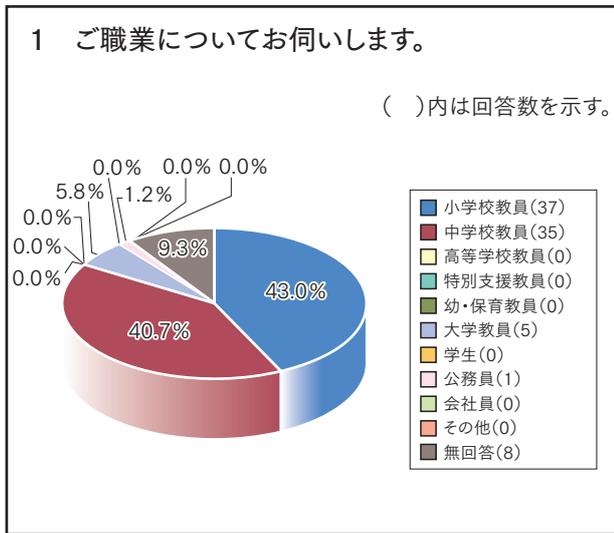
総合司会 (吉本)

ありがとうございました。では、以上をもちまして「第41回鳴教大教育・文化フォーラム」を終了いたします。なお、アンケートをご記入の上、受付の回収箱にお入れくださるよう、ご協力のほどよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

(終 了)

第41回鳴教大教育・文化フォーラム 来場者アンケート集計結果

参加者数	115
回答数	86
回答率	74.8%



【今後取り上げてほしいテーマ等】

- 特別支援教育について
- IT を利用した教育について
- 生徒指導について
- 学校は、日々の実践を阿南の児童生徒の弱みを捉え、強みに変える戦略を立て、中長期的な計画を策定し、見直し、改善し、RPDCA サイクルを何度もくり返していくことが急務であることを訴え、マネジメントの仕組みづくりを伝えるテーマを取り上げてほしい。
- 学校、子どもの実態に焦点化されたスリムな教育実践のあり方が求められる。スリム化への手だてについて取り上げていただきたい。
- 生徒指導面についてとりあげてほしい
- へき地教育について

【ご意見・ご感想】

- 地域との連携の大切さ、幼・小・中の連携の大切さを、改めて感じさせられました。
- 本日は、鳴教大 教育・文化フォーラムに参加し大変勉強になりました。椿町中学校区小中一貫教育という九年間をみすえた取り組みにとっても感銘を受けました。
- 多忙な教員に対し、子ども達の為といえど、いろいろな企画・取り組みを行うことにより、更に負担を掛けていいのか。教員自らの能力を更に高め続ける時間も必要である。どの様に、バランスをとり、時間を確保すればいいのか、その工夫について議論が欲しい。
- 講演のテーマは今日的でいいのですが、講師が聴衆を指名したり、話し合いをさせたりする手法はいかがなものか？これは講演であり、講義・授業ではないので…。正直、不愉快である。
- 発表された4校のすばらしい取り組みに感動しました。阿南市の未来は明るいと思いました。子どもは地域の宝です。教育の充実なしに住みよい社会の実現はないと思います。微力ではありますが、小学校の一教員として自分もがんばっていかねばと反省しました。家庭・地域との連携に地道な努力を続けたいです。
- 学校統廃合は、地域の再生にとって非常にマイナスである。有効な手立てを研究してみたい。
- パネリストの地域社会の中で、子どもの命、学びを通して、子ども達が実社会の中で、今、自分たちができることを考え、取り組み、経験し、実感して、自分を知る活動は、自分も社会の中の一員で、これから自分が将来を考える時の大切な宝になるだろうと思いました。
子ども達が自分のこれから、未来を考える時に、自分の夢や目標を見つけ、それを実現していく力をつけていけるようにするためにどのような取り組みをしていけばよいか、これから大切だと思いました。夢を描き、それを実現していける子どもの育成をみつめていきたいと思いました。多くのことを学ばせていただき、ありがとうございました。
- 家庭教育の重視が重要である。自主学习ノートの活用はすばらしかった。
- それぞれ各校でのすばらしい取組を知る機会を得て感謝しています。
普段は、あまり他校の取組を見ることもないので、とても参考になりました。こういう場を定期的実施してほしいと思います。
- 前田先生のお話、わかりやすかったです。講義と同じ形で興味深く聞くことができました。
(毎年鳴教大での開催ですが…) 4名の先生の取組は、阿南市内で魅力ある取組がたくさん行われていることを知るのにとってもよい機会となりました。これはなかなかおなじ市内でも知れ

る機会がありません。教育・文化フォーラムが阿南で開催されてよかったのではないかと思います。県内の教育の発信の機会として、各郡市で定期的に巡回開催してもよいと思います。おとなり足下のすばらしい実践をみんなで共有し、それぞれの学校で先生方が工夫して子どもたちのために取り組む。毎年でなくても実践交流が行われることを望みます。

- 「地域で考える子どもの学びと育ち」がテーマなので、もう少しテーマにそった報告や協議ができるよかった（テーマとは、離れていたように感じられる報告もあったように感じる）。まとをしぼった短い報告にして、そのあとの時間がもう少しほしかった。

- 前田先生はじめ、多くの先生方より、大変貴重なお取組みを、ご紹介頂いた。

目の前の子ども達とともに、子ども達の意見を大切にしながらこれからも今の自分に出きることを考え、頑張っていきたい。

本日を迎えるまでの一日、一日、本当におつかれ様でした。ありがとうございました。

- 「シンポジウム」って何なのでしょう？

大変参考になりましたが、参加者が「意見交換」するような「ディスカッション」ってむずかしいですね。

みんなが、活発に意見交換できるような会になれば、もっともっと有効になると思うのですが…そんな教員が、「言語活動」を活発にできる「シンポジウム?」「パネルディスカッション?」なら、もっと有意義になると思います。

- 地域とともに子どもを育てる取組みが必要だと言われ、様々な活動が紹介され、参考になりました。

学校規模により、活動内容が変わると考えられるが、大きな学校の取組を聞けるとよいと思います。

- 学校教育に求められていることは、基礎的・基本的な知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力・主体的・協同的なアクティブラーニングで、学ぶ児童生徒の姿である。まさしく、人と関わり学び合う、21世紀を生き抜く力を育成することにある。

社会の形成者として、ふるさと阿南、徳島、そして日本を創っていくたくましい人づくりの教育の実現をめざしたい。

このような教育活動を推進するには、教職員の意識改革が必要であると考えます。まず、今阿南の児童生徒に必要な求められている学力とは何か、身に付けさせるにはどのような方策があるかをすべての教職員が問題意識として捉えていかなければならないと考える。

- 本日のフォーラムでは、地域が学校のために様々な活動をしてくださっていることの具体的な紹介が多かったようですが、学校が地域に貢献している、学校が地域の活性化に役、買っているといった具体例があれば教えてほしかった。前田先生の講演にもあったように、子どもたちの学びが社会や地域のためであるにとらえているのであれば、学校が地域に何をできるかといったことも考えなくてはいけないと思うので、ぜひ、そういった観点からの具体例を紹介してほしかった。学校が地域に対して、地域を支えるために何ができるのか。今後、こういった観点での実践・討論の場をぜひ設けて欲しいです。

本日はありがとうございました。

- 子どもの豊かな育ちを考えた時、実感として、家庭・地域との連携の大切さは理解できる。反面、多忙感は深まる一方でもある。

- 地域の宝である子どもたちが、しっかりと学び、心健やかに育っていくためにと学校と地域・

保護者が連携し、一歩ずつ取り組んでいる画期的なものばかりでした。

子どもたちの安全が確保され、安心して、のびのびと成長していけるように、私もできることを1つずつしていきたいと思いました。

特に、子どもたちが地域に出て活動するような取り組みを続けたいなあと考えています。石橋先生、直売所販売等を通して、子どもたちに力をつけてくださって本当にありがとうございました。一緒に取り組めて大変勉強になりました。津小でのご活躍楽しみにしています。

- 他校の取組を聞き大きな刺激を得ました。自校の取組の参考にしていきたいと強く感じました。地域連携のために自分をかえていこうとする、かえていける教員でありたいと思っています。参加してよかったです。
- シンポジウムで協議の時間がもっと欲しかった。4名の報告に対する質疑の時間が少なかった。
- 前田先生の基調講演は納得のいくことばかりで特に子どもたちに“何故勉強するのか”という問いの答えは、その通りだと感じました。明日の登校日に子どもたちの顔をみるのが楽しみになりました。

各小中学校の取組も各校の特性をいかしたもので参考になりました。取り入れられることは授業の中にかかしていきたいと思います。

ありがとうございました。

- 日々の実践を丁寧に行うこと、少しアンテナを広げて動いていきたいですね。
- 講演会では、簡単で分かりやすく子どもたちの学びと育ちについてお話いただきました。私は低学年の児童を担当することが多いため、感情と言葉をつなげることや幼・保、またそれ以前からの生活、環境、学び等の今であること、社会人につながる今であることを改めて感じながらお話をうかがいました。授業の改善も課題です。

パネリストの方々のお話では、地域とのつながりを大切にした地道なとりくみについて知ることができました。先生方の取組の工夫や協働、見通しをもって信念をもった取組を通して、少しずつ子どもの育ちを感じることができるのだと思いました。とてもいい講演会でした。

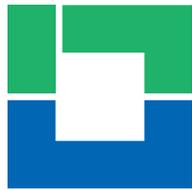
第41回鳴教大教育・文化フォーラム記録集

平成27年11月発行

編 集 鳴門教育大学社会連携課
発 行 鳴門教育大学
〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地
TEL 088-687-6101・6102 FAX 088-687-6100
E-mail chiiki@naruto-u.ac.jp
印 刷 (協)徳島印刷センター



FORUM



国立大学法人
鳴門教育大学

